

# ギリズとミトフォードにおけるクレオンの描き方についての一考察

堀 井 健 一

## Cleon in the Descriptions of J. Gillies and W. Mitford

Ken-ichi HORII

### はじめに

ジョン=ギリズ (1747-1836年) は全8巻の『古代ギリシアの歴史』(*The History of Ancient Greece, its Colonies, and Conquests*) を著した。最初は1786年にロンドンで2巻本として刊行されたが、その後8巻本になった<sup>(1)</sup>。この著作は、かつて人気があったし、読み物的であるが幾分仰々しい文体で書かれたと評されている<sup>(2)</sup>。

ウィリアム=ミトフォード (1744-1827年) は全10巻の『ギリシア史』(*The History of Greece*) を著した。彼の著作は、多年の間人気を博し続けたし、古代ギリシアという比較的無視される主題についての骨の折れる英文作品を提供したと評されている<sup>(3)</sup>。また、同時代人のジョン=ギリズの『古代ギリシアの歴史』よりも多くの点で優れているといわれる<sup>(4)</sup>。

ところで、古代ギリシアの政治家クレオンは、これまでしばしば民主制期アテネのデマゴグの一人と評されてきた。クレオンは、彼と同時代の代表的政治家のペリクレスやニキアスが貴族の出であったのに対して、非上層民出身でありながらペリクレスやニキアスらを公然と非難したりして彼らに対抗しようとし、時にはニキアスに代わって将軍としてスファクテリアへ軍事遠征に出かけるなどした。彼のそのような無鉄砲さと民衆寄りの指導者として振る舞っては上層市民を苦しめた行動は、同時代の喜劇作家アリストファネスによってしばしば喜劇作品中の嘲笑的にされた。さらにはスパルタの常勝将軍ブラシダスと張り合い、ついにはアンフィポリスの戦いで彼の軍によって敗北して戦死した。クレオンのデマゴグぶりは、周知のとおり、従来、アテネ民主制の欠点として近代西洋人たちによってしばしば指摘されてきた。近代西洋人たちが古代アテネの民主制をどのように理解してきたかを探る際、しばしばデマゴグとして評されてきたクレオンの人物像が近代西洋人によってどのように形成されてきたかを把握する必要がある。近代人によって描かれたクレオンの人物像の形成過程を把握することによって彼の実像と描写された人物像との間の違いが明らかになる可能性があるし、そしてもしかかる違いが明らかになれば、彼の人物像と関連性のあるアテネ民主制観も改めて検討し直す必要が生じてくる可能性があるのではなかろうか。かかる理由から筆者はかつて、ギリズの『古代ギリシアの歴史』<sup>(5)</sup> とミトフォードの『ギリシア史』<sup>(6)</sup> におけるクレオンの描き方を検討した。

そこで、本稿では、この検討の結果を参考にして、ギリズとミトフォードの両者によるクレオンの描かれ方を比較・検討してその叙述の特徴とその理由を考察したい。

## 第1章 ギリズ『古代ギリシアの歴史』とミトフォード『ギリシア史』におけるクレオンの描き方の検討および比較

### 第1節 クレオンに伴う形容

筆者は以前にギリズの『古代ギリシアの歴史』とミトフォードの『ギリシア史』におけるクレオンに関する叙述の中に彼らが参照したはずのトゥキュディデス『歴史』(以下、Thuc.と略す)の史料から逸脱した記述や表現を挙げた。以下ではクレオンに伴う形容表現を改めて列記してその特徴を考察する。

まず初めに、ギリズの『古代ギリシアの歴史』におけるクレオンに伴う形容表現を挙げる。ギリズはミュティレネ人処遇時に関する叙述の中で、クレオンの人となりについて乱暴なデマゴグ、生れの卑しい成り上がり者、横柄で凶々しい、厚顔無恥で生意気、不徳の最悪のものを持つ者であり、アテネ民衆にはかかる彼の性格が大胆で男らしい率直さを持つ者として好意的に映ったと述べる<sup>(7)</sup>。また、スファクテリアの戦いに関連して、ギリズはクレオンについて、狡猾なデマゴグ、とぼけた奴、厚かましくも英雄のような言い回しを述べて大衆の間で笑いを誘う人物、尊大なデマゴグと述べる<sup>(8)</sup>。アリストファネスの諸喜劇に関連するクレオンについてギリズは、その喜劇作者にとって彼がスファクテリア攻撃の後に悪名高い臆病者でありながら運の気まぐれによって成功した人物に変身したので話の種となったと述べるし、傲慢なデマゴグであり、無能で横柄であると述べる<sup>(9)</sup>。アンフィポリスの戦いの時のクレオンに関連してギリズは、横柄なデマゴグで我慢できない気質を持つと述べ、戦いに際しては敗走時に真先に戦死したし、他の戦死した6百人のアテネ人兵士はクレオンの愚行の犠牲として倒れたし、また彼の死は不運な同国人たちの死者の靈魂をなだめたことであろうと述べる<sup>(10)</sup>。

次に、ミトフォードの『ギリシア史』におけるクレオンに伴う形容表現を挙げる。ミトフォードはミュティレネ人処遇時に関する叙述の中で、クレオンの演説の際の乱暴さと激しさ、非人道的な性格、脅威によって物事を進めようとする強硬さを示唆するが、彼の乱暴さはThuc., 3.36.6の中で叙述されているので、この点に関するミトフォードの記述はこのトゥキュディデスの叙述にならったのであろう<sup>(11)</sup>。スファクテリアの攻撃に関連するクレオンについてミトフォードは、厚かましさと強運の持ち主、責任を他人になすりつける人物、ニキアスの代わりに將軍になると得意になり横柄なやり方を続ける人物と述べ、さらに彼の冒険家的性格、生意気さ、横柄さ、節度のなさに言及する<sup>(12)</sup>。アンフィポリスの戦いに関連するクレオンについてミトフォードは、攻撃の進め方に無知な人物、戦死に際しては逃走という不面目で目立つ形で彼にふさわしい死をもらい受けた人物と述べる<sup>(13)</sup>。

以上のように、クレオンについてギリズとミトフォードは、ほとんどトゥキュディデスの記述から逸脱して彼のイメージを損なう形容表現を次々と述べている。ギリズとミトフォードはなぜトゥキュディデスの記述から逸脱してこのような表現を次々と述べたのであろうか。この問題については後の方で論じるつもりである。

### 第2節 ピュロス攻撃増援派遣前のクレオンとニキアスの間のやり取りについての叙述

ギリズ<sup>(14)</sup>は『古代ギリシアの歴史』の中で、ピュロスからの使節からピュロス攻撃態勢の不利の報告を受けた後にクレオンが現地視察団の派遣を回避するためにその代わり

に将軍が男であるならば数日のうちにスファクテリアを奪取できるし、自分が将軍であるならば最初の攻撃で奪えると公言したし、「これらのいやみな意見は主としてニキアス、現に民会に出席していた将軍たちのひとり、に対して向けられた」と述べる。この箇所のギリズの記述は大筋ではThuc., 4.27.4-5の中の記述に沿ったものであるといえる。だが、トゥキュディデスとギリズの記述を比較すると、トゥキュディデスの記述がこの箇所以降で淡々と事の成り行きを述べるのに対して、ギリズはその後、「ニキアスの性格」という副題を添えてニキアスの人柄を解説する。すなわち、ニキアスは、「有徳であるが臆病な気質の持ち主であり、並みの能力、そして過度の富を持っていた」人物であり、また「貴族制の熱心な支持者で、クレオンの敵と公言した人であり、彼を自国の中で最悪の敵と見なしていた」と述べる<sup>(15)</sup>。この箇所でのギリズの狙いは、ニキアスなる人物がそれまでの彼の記述の中ではほとんどアテネの政治の面では表舞台に登場しなかったけれども、ここではクレオンの敵対者として重要な役割を演じるので、また、周知のとおり、彼が後にシケリア遠征の敗北を招く将軍としてアテネの政治史の中で肝要な役割を演じることになるので、読者の便を図って彼の人柄の紹介を行なおうとしたことであろう。そのため彼は、トゥキュディデスの淡々と事件を伝える記述を離れて、ニキアスの人柄の紹介に話を転じたと思われる。なお、ギリズによる「ニキアスの性格」と題する叙述の内容は、トゥキュディデス『歴史』とプルタルコス（以下、Plut.と略す）『ニキアス伝』によって描かれるニキアスの諸行為などにあらかじめ目を通せば一般に得ることのできる事柄であり、珍奇なものではないと思われる。

さて、次にクレオンとニキアスの間で責任の押しつけ合いが始まるのであるが、この件についてのギリズの叙述<sup>(16)</sup>は、アテネ人たちが「いつもの放縦さを民会に蔓延させながら」クレオンに対してスファクテリア攻撃の企てがそれほど容易であるならば彼に似合いであると大声で叫んだと述べている。この件についてトゥキュディデスは、アテネ人たちがクレオンに対して遠征が容易なのにまだ出航していないと怒り始めたと述べる(Thuc., 4.28.1)し、プルタルコスも、アテネ民衆がクレオンに対してなぜ出航しないのかと言ったと述べる(Plut., *Nicias* 7.3)。ギリズの叙述と彼にとって史料となるトゥキュディデスおよびプルタルコスの叙述を比較するならば、ギリズがアテネ民衆の放縦さを明言していることが際立つ。

また、ギリズ<sup>(17)</sup>は、その件に続いて「ニキアスは立ち上がって、すぐさま彼に指揮権を譲ることを申し出た」と述べる。この言い回しは見たところPlut., *Nicias* 7.3のとおりであり、Thuc., 4.28.1が、ニキアスがクレオンに欲しい分だけ軍勢を率いて企ててみるように言うだけであるのとは表現の仕方が異なっている。従って、かかるニキアスとクレオンの議論の応酬の件は、ギリズがトゥキュディデスとプルタルコスの両者の記述を念頭において描いていることが分かるので、彼がこの件を比較的丁寧に描き出そうと試みたと考えられよう。

さて、クレオンとニキアスのやり取りのその後は、ニキアスがスファクテリア攻撃の指揮権をクレオンに譲ると申し出たので、クレオンは事態がそのように進むとは思わなかったものであるから攻撃のための出航を拒否しようとした(Thuc., 4.28.2-3)。この件についてギリズ<sup>(18)</sup>は、大筋ではトゥキュディデスとプルタルコスの記述と同じであるものの、クレオンが出航を引き受けたくないの「後ろへ退」いたし、「アテネ人たちが、大衆に

ふさわしい意地の悪いからかいかでもって、クレオンに間近に押し寄せれば押し寄せるほど、ますます熱心に彼は退いた」と述べており、この点で2人の古代著述家とは言い回しが異なる。そしてギリーズ<sup>(19)</sup>は、クレオンが「ついに彼ら〔アテネ民衆のこと、引用者注〕のしつこさに負けた」が、次に彼が厚かましさを表に出して、「民会の真ん中に進み、『自分はラケダイモン人たちを恐れていない。20日以内で、スパルタ人たちを囚人としてアテネに連れてくるか、あるいは試みて死ぬかを約束する』と宣言した」と述べる。従って、ギリーズは、クレオンにまずは少しずつ後退させ、次には彼を「民会の真ん中に進」ませているので、彼の厚かましさを強調することと読者のために叙述場面の劇的効果を高めることを試みたと思われる。さらに、ギリーズ<sup>(20)</sup>は、かかるクレオンの発言に関連して、「この英雄のような言い回しは大衆の間で笑いを誘った」と述べる。アテネ市民たちがクレオンの発言に応えて笑ったことはそれだけで読者のクレオンに対する印象を悪くするものであるが、Thuc., 4.28.5の中には「空疎な大言壮語による笑い」がアテネ人たちの間に起こったと、そしてPlut., *Nicias* 7.4の中には「大笑いした」という記述がある。従って、この件についてはギリーズがクレオンの評判を落とすためにしっかりとトゥキュディデスおよびプルタルコスの叙述に沿って記述を進めたと考えられる。

このようにギリーズは、トゥキュディデスの記述にあらかた沿って記述しながら、プルタルコスの叙述をしっかりと参考にして記述をしている。また、一部では読者の便宜を図ってであろうか、ニキアスの性格描写を挿入したり、描写情景の劇的効果を提供するように工夫しながら記述を進めている。

他方、ミトフォード『ギリシア史』におけるピュロス遠征関係の叙述におけるクレオンの描き方をみると、トゥキュディデス史料の記述にあらかた沿って記述しながらも時折それから逸脱した記述がみられるものの、ギリーズのように読者に劇的効果を提供するように工夫するとみられる箇所はみられないようである<sup>(21)</sup>。

### 第3節 アンフィポリスの戦いにおけるクレオンについての叙述

初めに、ギリーズの叙述を検討する。アンフィポリスの郊外に陣を張ったアテネ軍が援軍の到着を待っていた時、兵士の中でブラシダスに比してのクレオンの無能と臆病に不満を述べる者が出てきた。それに対して、クレオンは、そもそも自身がマケドニア王ペルディッカス2世とトラキアのオドマントイ人の王ポレスに援軍を要請していた(Thuc., 5.6.2)のであるが、兵士の不満に気づき、さらに「兵士が同じ場所に居座って重苦しい気分になるのは好ましくないと考えたので」(藤縄訳)<sup>(22)</sup>軍を動かすことにした(Thuc., 5.7.2)。他方、ギリーズ<sup>(23)</sup>は、クレオンが兵士の不満に気づいた後、「横柄なデマゴグの我慢できない気質が、こういう扇動的な不平不満に耐えるのには適していなかった。彼は急いで自軍をふさわしい場所の前に導いたが、それは前もって城壁の強度、土地の状況、敵の人数または配置を吟味することをせずであった」と述べる。この箇所ではギリーズによってクレオンの我慢の無さが指摘されているが、この件についてはトゥキュディデスは言及していないので、その記述はギリーズによる創作である。また、ギリーズによればクレオンは「前もって城壁の強度、土地の状況、敵の人数または配置を吟味することをせず」いたことになっているが、他方ではThuc., 5.7.3-5が、クレオンが敵軍のいるアンフィポリスとその周辺を視察するためにアンフィポリスの中心市を見渡すことのできる山に登りに行

くと述べ、実際にそこから視察したことを報告している。確かにトゥキュディデスの記述にあるように (Thuc., 5.7.3), クレオンの視察の際に彼がブラシダス側が攻撃をしかけるとは予想していなかったことは明白である。けれども、前述のように、ギリズが、クレオンが前もって土地の状況や敵の人数または配置を吟味することをせずにと述べることは、曲解とは言えないまでも言い過ぎと見なすことはできまいか。

次に、ミトフォードによる叙述を検討してみる。クレオンは、マケドニア王ペルディッカスとトラキアのオドマンティ人の王ポレスに使節を派遣して援軍を請うた後、エイオンの地でしばらくじっと待機した (Thuc., 5.6.2)。他方、ブラシダスは、トラキア人傭兵やその他の援軍を集めてクレオンがアンフィポリスを攻めるのを待っていた (Thuc., 5.6.3-5)。トゥキュディデスが伝えるこれらの状況についてミトフォード<sup>(24)</sup>は、「クレオンは、彼の仕事は攻撃作戦であったが、トゥキュディデスによれば、どのように進めてよいのか単に無知であったので、ある程度の時間全く何もしないままであった」と解説する。トゥキュディデスの記述から明らかになることは、クレオンがマケドニアとトラキアからの援軍の到着を待つためにエイオンで待機していたことであり、実際、Thuc., 5.10.3はクレオンが援軍到着の前の交戦を望んでいなかったと語っている。加えて、ミトフォードは、前述の彼による解説の10行下では「他にもない彼〔クレオンのこと、引用者注〕の望みは、自分が期待する増員を待つことであった」と記しており<sup>(25)</sup>、クレオンの考えていたことを理解しているのである。従って、ミトフォードが、クレオンがアンフィポリス攻撃を始めずにじっと待機していたのは彼がどのように攻撃を進めてよいのか無知であったためであると述べるのは、トゥキュディデスの記述から逸脱したミトフォード自身の曲解にすぎないことが分かる。けれども、それ以降のクレオン軍の行動についてのミトフォードの記述は、しばらくの間トゥキュディデスの歴史書の記述に沿った形で進められ、クレオン指揮下のアテネ軍が自分の将軍と敵のブラシダスの両者の力量を比べてクレオンの劣る点に不満を抱いたことや、アテネ軍の不満が高まったので、スファクテリア戦で使った戦略どおりにクレオンが敵軍視察のために軍勢を高台に向けて進めたことなどが叙述されている<sup>(26)</sup>。

これまでのギリズとミトフォードによる叙述を比較・検討して、その特徴を1点だけ挙げてみる。ギリズの叙述によれば、クレオンが自身の我慢の無さから「前もって城壁の強度、土地の状況、敵の人数または配置を吟味することをせず」に自軍を進軍させてしまった軽率さが示されている。他方、ミトフォードによれば、「クレオンは、彼の仕事は攻撃作戦であったが、トゥキュディデスによれば、どのように進めてよいのか単に無知であったので、ある程度の時間全く何もしないままであった」と解説することによってクレオンの無能ぶりを示すことが意図されている。

次に、アンフィポリスの戦いについての叙述を検討してみる。まず初めに、ギリズの叙述について検討する。その戦いについてのギリズの叙述を抜粋すれば下記のとおりである。

その間、ブラシダスは、自分の敵が厚かましいことでよく知られていることを利用する適切な策を講じた。かなりの人数の男がケルデュリオンの木々の多い山の中に隠されたが、そこはアンフィポリスに突き出していた。軍隊の大半が、その都市のいくつかの門の所に、行動に備えて整列させられた。クレアリダスは、その地で指揮をと

ったが、所定の合図で前へ急いでいくよう命令を出したし、他方、ブラシダスは、自ら、恐れを知らない従者の選りすぐり部隊を指揮し、最初の攻撃の機会をうかがった。その計画は、非常に多くの技でもって考案されたが、同様の巧妙さでもって実行された。敵はそのような予期せぬ複雑な攻撃の迅速さと正確さに当惑して、大急ぎで逃げ出し、自分の盾を放り出し、自分のむき出しの背中を追手の剣や槍にさらした。両方の側の軍勢は総計で約3千人に達した。6百人のアテネ人たちがクレオンの愚行の犠牲として倒れたし、彼はその敗走時に真先であったけれども、ミュルキノス人の盾兵の手によって捕らわれた。

彼の死は彼の不運な同国人たちの死者の靈魂をなだめたことであろう。〔以下を略すが、ブラシダスの負傷・死亡と葬送のことが記述されている〕<sup>(27)</sup>

アンフィポリスの戦いの戦闘の様子について、ギリズ<sup>(28)</sup>は、クレオンのアテネ軍がブラシダス側の「そのような予期せぬ複雑な攻撃の迅速さと正確さに当惑して、大急ぎで逃げ出し、自分の盾を放り出し、自分のむき出しの背中を追手の剣や槍にさらした」し、「6百人のアテネ人たちがクレオンの愚行の犠牲として倒れ」、クレオンが「その敗走時に真先であったけれども、ミュルキノス人の盾兵の手によって捕らわれ」て戦死したと述べる。他方、トゥキュディデスは、アテネ軍が敵の急襲を受けて混乱して敗走したものの、逃げ残った右翼の一部はクレアリダスの攻撃を数回撃退した後に包囲されたので槍を投げて潰走したと報告する(Thuc., 5.10.9-10)。従って、アテネ軍は、全軍がギリズの記述にあるように「大急ぎで逃げ出し、自分の盾を放り出し、自分のむき出しの背中を追手の剣や槍にさらした」わけではない。また、ギリズによる「自分のむき出しの背中を追手の剣や槍にさらした」という記述に関連するものを強いて挙げるならば、Thuc., 5.10.4の中でアテネ軍の右翼がクレオンの指示に従って敵軍に無防備な方を向けたままで撤退したと記述されている箇所がある。だが、これは、アテネ軍が西側のアンフィポリス在留の敵軍に対して南に位置するエイオンへ向けて撤退したので、槍を持つが盾では防げない右手側を敵軍に向けざるをえなかったことを示唆する。従って、ギリズの「自分のむき出しの背中を追手の剣や槍にさらした」という記述は、彼の勘違いかあるいは創作と見なすことができよう。さらに、アンフィポリスの戦いの叙述の最後にギリズ<sup>(29)</sup>は、クレオンの「死は彼の不運な同国人たちの死者の靈魂をなだめたことであろう」と述べる。かかる表現は、ギリズによるクレオンへの皮肉を表現したものであろう。そしてこの文言は、「ブラシダスの死と葬礼」と副題の付く段落の最初の文章の中にあり、その段落の中では続いてブラシダスの戦死の様子が、そしてその戦勝の英雄としての葬儀およびアンフィポリス人の彼を讃える諸行為がトゥキュディデスの記述(Thuc., 5.11.1)に沿う形で、記載されている。ブラシダスの戦死は、トゥキュディデスによれば、クレオンの戦死の直前に受けた負傷によるもので、前線から救い出された(Thuc., 5.10.9)後にアンフィポリスのポリス内で戦勝の知らせを受けてから死んだ(Thuc., 5.10.11)ことになっている。従って、クレオンの戦死とブラシダスの負傷の記述の仕方がトゥキュディデスとギリズの間で異なるわけであるが、その理由は、上記のように、ギリズがブラシダスの件を「ブラシダスの死と葬礼」と副題の付く段落の中で述べることによってクレオンの死とブラシダスの死を明らかに対比させることを試みたせいであろう。

次に、同じくアンフィポリスの戦いについて、ミトフォードの叙述を検討してみる。その戦いについてのミトフォードの叙述を抜粋すれば下記のとおりである。

こういう事の状況で、アテネ人の左翼は、ある程度前進していたが、素早く受け取っていた命令に従い、エイオンへの行軍を急いだ。それは、中央から割れて、すぐに敵の届かないところにあった。この行為は、その将軍〔クレオンのこと、引用者注〕の行為によって正当化されるが、なにも彼を最初の目的、つまり撤退からそらすことができなかつたからである。彼は、安全のために左翼に加勢する意図で、右翼を止めたが、ミュルキノス人の盾兵によって阻まれ、彼らから彼にふさわしい死を、逃走という不面目で目立つ形で、もらい受けた。〔以下を略すが、ブラシダスの負傷・死亡と葬送のことが記述されている〕<sup>(30)</sup>

クレオンの軍勢がアンフィポリスの城壁内のブラシダス軍に気がついて彼の命令によってエイオンへ撤退を始めた時に敵軍に襲われるまでの一連の出来事についてのミトフォードによる叙述は、それほどトゥキュディデスの記述 (Thuc., 5.10.2-8) から逸脱しているわけではない。すなわち、クレオンの軍勢が南方のエイオンへ撤退しようとしたので彼らの西側にいたアンフィポリスの軍勢に対しては盾を持たぬ右側をさらしたので不利であったこと、ブラシダス軍がその状況を見て自軍に有利と見てアンフィポリス城壁の南側の第一門からアテネ軍を襲っただけでなく続いて城壁北側のトラキア門からクレアリダス率いる軍が撤退中のアテネ軍のいわば後方から襲ったのでアテネ軍が挟み打ちに合い混乱したことなどである<sup>(31)</sup>。だが、ブラシダスとクレオンの両者の戦死についてのミトフォードの取り扱いとはトゥキュディデスのものと異なっている。トゥキュディデスは、ブラシダスの手勢とクレアリダスの手勢が襲撃した後にブラシダスが負傷して倒れて味方に助け出されたこと（まもなくアンフィポリス城壁内で死亡）を記した後に、クレオンが踏みとどまることなく逃走中にミュルキノス人の盾兵によって襲われて戦死したことを伝える (Thuc., 5.10.9)。それに対してミトフォード<sup>(32)</sup> は、クレオンの戦死についてアテネ軍が撤退する中で「ミュルキノス人の盾兵によって阻まれ、彼らから彼にふさわしい死を、逃走という不面目で目立つ形で、もらい受けた」と述べた後も、ブラシダスが自軍に攻勢を命じて自らも激しく戦ったので負傷を受けて倒れ、友人たちによって運び出されたと述べる。ここではトゥキュディデスとミトフォードの間でブラシダスの負傷とクレオンの戦死についての記述の順番が違うし、またトゥキュディデスがクレオンの戦死について、彼が踏みとどまるつもりがなかったと記して彼の戦死の不名誉な点を暗示するだけであるのに対して、ミトフォードは明瞭に分かる形でクレオンの逃走中の死を不面目であり「彼にふさわしい死」と述べている。ミトフォードがトゥキュディデスと違ってブラシダスの負傷とクレオンの戦死の両事件の記述の順番を入れ換えたことによって読者の頭に刷り込まれやすくなることは、クレオンが逃走中であつて死んで大変不面目であったこととブラシダスが戦死に至る負傷の前に彼の戦勝にふさわしい奮戦ぶりをしばらくの間示したことであろう。

以上のアンフィポリスの戦いについてのギリズとミトフォードの叙述を比較してみて、注目すべきことは、両者が両者とも、歴史叙述の際に参照した史料であるトゥキュデ

イデスの記述の順番とは異なる形でクレオンの死を語っていることである。すなわち、トゥキュディデスは、「かくして〔クレオンのアテネ軍の〕左翼が既に敗退すると、ブラシダスは右翼に対して次々に攻めかかっているうちに、自ら負傷した。そして彼は倒れたのだが、アテナイ軍は彼に気づかず、近くにいた味方の兵士が担ぎ上げて運び去った」(5.10.8)と、そして「アテナイ軍の右翼だけは、かなり踏み止まって抵抗した。だが、クレオン自身は最初から踏み止まる意図はなかったので、直ちに逃亡して、ミュルキノス人の軽盾兵に追いつかれて殺された」(5.10.9) (藤縄訳)<sup>(33)</sup>と記述しており、アンフィポリスの戦いにおいてスパルタの将軍ブラシダスの負傷転倒が先でクレオンの戦死が後になっている。それに対して、ギリズとミトフォードは両者とも、クレオンが戦死した後にブラシダスが負傷して味方によってアンフィポリスの砦まで運ばれてそこで息を引き取ったと記述する。さらに、ギリズは、クレオンが「その敗走時に真先であったけれども、ミュルキノス人の盾兵の手によって捕らわれ」て戦死したと記述し、そしてミトフォードは、アテネ軍が撤退する中でクレオンが「ミュルキノス人の盾兵によって阻まれ、彼らから彼にふさわしい死を、逃走という不面目で目立つ形で、もらい受けた」と述べ、クレオンが戦闘の中で真先に不面目な形で殺されたことを強調している。ギリズとミトフォードの両者が両者ともアンフィポリスの戦いにおけるクレオンの戦死を不名誉な出来事として描こうとしてトゥキュディデスの記述とは異なる形でブラシダスの負傷転倒の出来事とクレオンの戦死の出来事の記述の順番を意図的に入れ換えたことは興味深い。上記で指摘したように、ギリズもミトフォードも両者とも、名誉の戦死を遂げた勝者側のブラシダスが、敵の将軍クレオンの戦死後もしばらく勇猛に戦って負傷し、その負傷が元で死去したように記述することによって、ブラシダスを持ち上げ、クレオンの評判を貶めようと企てたことは間違いないであろう。

## 第2章 ギリズとミトフォードはなぜクレオンを悪しざまに描いたのか

イギリスのギリズやミトフォードはなぜアテネ民主制を否定的に描いたのか。本稿の中では、ギリズやミトフォードの著作の検討を通して、政治家クレオンのデマゴグぶりや横暴さなどの悪しき性格が、彼らの史料であるトゥキュディデス『歴史』の記述を逸脱して言及されている様子を浮き彫りにした。

ギリズやミトフォードの著作の場合、政治家クレオンのデマゴグぶりや横暴さなどの悪しき性格が、彼らの史料であるトゥキュディデス『歴史』の記述をはずれて言及されているけれども、彼ら2人が史料として参照したはずのトゥキュディデス『歴史』の中ではそれほどクレオンが悪しざまに書かれてはいない。それゆえに、なぜギリズとミトフォードがトゥキュディデス史料を度々逸脱して政治家クレオンを悪しざまに書いたのかを問題にしなければならない。その理由を探ると、まず、ミトフォードが貴族出身であること<sup>(34)</sup>やギリズがどうやら貴族ではないがスコットランド歴史編纂官に就任するほどの社会的地位を得ていたこと<sup>(35)</sup>、つまり彼らの出自ゆえにアテネ民主制を悪しきものとして記そうとしたことが考えられる。当然のことながら、ギリズが、自身のギリシア史の著作を国王ジョージ3世に寄贈したこと<sup>(36)</sup>から、アテネ民主制を自国の王制と対局において描こうとしたことも考え合わせなければならない。次にアリストファネスの諸喜劇作品、『アカルナイの人々』、『騎士』、『蜂』の中で政治家クレオンが、その出自と職業を含めて、

何度となく悪しざまに言われ、嘲笑的になされていることがギリーズとミトフォードの知るところとなっていたことが考えられる。

さらにギリーズの場合、彼には訳書として『リュシ阿斯とイソクラテスの弁論』(1778年)、『アリストテレスの倫理学および政治学』(1797年)、『アリストテレスの弁論術』(1823年)があるので<sup>(37)</sup>、リュシ阿斯やイソクラテスの弁論の中にある反民主制的言及、特にイソクラテスの第7番演説『アレオパゴス評議会について』における反アテネ民主制の論やアリストテレスの主要著書『政治学』における反民主制的論点に通じていた可能性がある。また、ギリーズやミトフォードの場合、それぞれ古代ギリシアの歴史を執筆するにあたり、ヘロドトスやトゥキュディデスの歴史書、リュシ阿斯やイソクラテスやデモステネスらの弁論集、プラトンやアリストテレスらの哲学・政治学その他の著作に目を通したと考えられる。それゆえ、彼ら2人は、トゥキュディデスの歴史書の中に数箇所見られるアテネ民衆への軽蔑の吐露、伝クセノフォン『アテネ人の国制』の中の寡頭主義論、すなわちアテネ民主制批判、イソクラテスの寡頭主義的論点、プラトンやアリストテレスの反民主制的論説、プルタルコス『フォキオン伝』33-38章の例のような彼の対比列伝に数箇所見られるアテネ民衆への軽蔑を示唆する記述から影響を受けた可能性があろう。ロバーツ<sup>(38)</sup>の指摘を待つまでもなくプルタルコスの対比列伝は古代ギリシア・ローマの英雄、豪傑を扱った伝記としての魅力から未成年者にも親しみやすかったであろうのでイギリスの知識人層の間で広く読まれたであろうから、そしてプラトンとアリストテレスの諸著作はイギリスの高等教育機関などで広く勉強されたといわれているので、これらプラトン、アリストテレス、プルタルコスの著作がギリーズとミトフォードに与えた影響は計り知れなかったのではなかろうか。

### 結びに代えて

ギリーズとミトフォードの著作におけるクレオンの記述の仕方を見れば、彼ら2人は明らかにアテネ民主制がデマゴグに操られた衆愚政治であるかのように記述されていることが分かる。18-19世紀のイギリスの歴史家や政治家は概して、アテネ民主制を衆愚政治と見ていたに違いない。

だが、他方では、古代ギリシアの歴史家トゥキュディデスによるクレオンに関する記述は、著者が事実を則して執筆することを宣言していることであろうが<sup>(39)</sup>、やはりクレオンが明らかにデマゴグぶりを発揮しているとは読み取れないのではなかろうか。それに対して、ギリーズやミトフォードの著作にみられるクレオンのデマゴグぶりは、前述のとおり、明らかにアリストファネスの諸喜劇の影響がうかがえると考えられる。

だが、アリストファネスの諸喜劇の影響を考慮する際に、筆者は次のことに注意しなければならないと思う。すなわち、喜劇作品というものが、嘲笑的になった人物のいくつかの特徴を大げさに、また時には他の同類の人の特徴までも添えて誇張して描こうとするからであり、そこには描かれている人物の真実の姿が反映されていないと考えられることである。特に、ソクラテスの問題についてはそのことがいえるのではなかろうか。つまり、ソクラテスはアリストファネスの喜劇『雲』の中で嘲笑的になったが、プラトンの諸著作のおかげでアリストファネスの『雲』によって描かれたソクラテス像を彼の真実の姿とみなす哲学者はまずいないであろう。実際、ギリーズ自身も、ソクラテス裁判の遠因とし

てアリストファネス『雲』の「滑稽な笑劇」<sup>(40)</sup>を挙げている。さすれば、政治家クレオンについても、歴史家は、その真相をアリストファネスに求めるべきではなく、トゥキュディデスや、彼についての記述は少ないがプルタルコスに求めるべきではなかろうか。たしかにソクラテスがアリストファネスによって嘲笑の的として描かれたのは『雲』1作だけであったがクレオンが彼によって嘲笑の的として描かれたのは『アカルナイの人々』、『騎士』、『蜂』の3作であるので、作品数の比較を行えばクレオンの言行や態度がいかに攻撃の的にふさわしかったかが示唆されるかもしれない。けれども、前述のように歴史家はクレオンの真相をアリストファネスではなくトゥキュディデスやプルタルコスに求めるべきであると考えられるならば、ギリズやミトフォードの叙述における政治家クレオンのイメージは再検討の必要があろう。かかる再検討の作業を行なうならば、その際にはトゥキュディデス史料が最重要視されるべきであろうし、さらには、クレオンがギリズやミトフォードが描くほどデマゴグではなかった可能性が見出せるかもしれない。

## 註

- (1) G. Smith, L. Stephen and S. Lee eds., *Dictionary of National Biography* 7 (Oxford, 1921-1922), p. 1247 s.v. GILLIES, JOHN.
- (2) *Ibid.*
- (3) G. Smith, L. Stephen and S. Lee eds., *Dictionary of National Biography* 13 (Oxford, 1917), p. 534 s.v. MITFORD, WILLIAM.
- (4) *Ibid.*
- (5) 拙稿「ギリズ『古代ギリシアの歴史』におけるクレオンの描き方」『長崎大学教育学部社会科学論叢』61号(2002年)1-15頁。
- (6) 拙稿「ミトフォード『ギリシア史』におけるクレオンの描き方」『長崎大学教育学部紀要-人文科学-』64号(2002年)1-13頁。
- (7) 拙稿、『社会科学論叢』61号, 3頁。
- (8) 拙稿、『社会科学論叢』61号, 5-7頁。
- (9) 拙稿、『社会科学論叢』61号, 7頁。
- (10) 拙稿、『社会科学論叢』61号, 11-12頁。
- (11) 拙稿、『紀要-人文科学-』64号, 3頁。
- (12) 拙稿、『紀要-人文科学-』64号, 5-6頁。
- (13) 拙稿、『紀要-人文科学-』64号, 8-9頁。
- (14) J. Gillies, *The History of Ancient Greece, its Colonies, and Conquests* [以下H.A.G.と略す] 2 (London, 1820), p. 282.
- (15) *Ibid.*, p. 282.
- (16) *Ibid.*, p. 282.
- (17) *Ibid.*, p. 282.
- (18) *Ibid.*, p. 282-283.
- (19) *Ibid.*, p. 283.

- (20) *Ibid.*, p. 283.
- (21) 拙稿, 『紀要－人文科学－』64号, 3-6頁を参照せよ。
- (22) 藤縄謙三訳『トゥキュディデス 歴史1』(京都大学学術出版会, 2000年) 502頁。
- (23) Gillies, *H.A.G.* 2, p. 302.
- (24) W. Mitford, *The History of Greece* 3 (London, 1835), p. 277.
- (25) *Ibid.*, p. 277.
- (26) *Ibid.*, p. 277-278.
- (27) Gillies, *H.A.G.* 2, p. 302-303.
- (28) *Ibid.*, p. 303.
- (29) *Ibid.*, p. 303.
- (30) Mitford, *op. cit.*, p. 279-280.
- (31) *Ibid.*, p. 279-280.
- (32) *Ibid.*, p. 280.
- (33) 藤縄訳, 前掲書, 506-507頁。
- (34) 拙稿, 『紀要－人文科学－』64号, 2頁。
- (35) 拙稿, 『社会科学論叢』61号, 2頁。
- (36) J. Gillies, *H.A.G.* 1 (London, 1820), p. iii-iv.
- (37) 拙稿, 『社会科学論叢』61号, 2頁。
- (38) J.T. Roberts, *Athens on Trial: The Antidemocratic Tradition in Western Thought* (Princeton, 1994), p. 118. この中でロバーツは, 「プルタルコス, 古代のキリスト教信者でない著述家たちのなかで最も多作な人のひとりであった。彼の現存する諸著作は, おそらく彼の実際の作品公表のほんの約半分に相当するが, 多くの本であふれている。ルネサンスの間のイタリアで, 17および18世紀の間のイングランドとフランスで, アメリカでは革命前後の諸世代の間でプルタルコスは断然, 最も人気のある古典期の作家であった。彼が共和制の美德を称賛したことは, 啓蒙専制政治に対する彼の温情と非常に適切に釣合いがとれていたもので, 王党派たちと共和派たちの両者が彼を自分たちの聖典であると主張することができた。他にもない19世紀までは, 鑑識眼のある思想家たちは, 彼の生き生きとした愛想のよい散文が現に歴史と政治の分析にとって信頼できる資源であるかどうかを疑問視し始めなかった」し, またプルタルコスの著作は「良い市民の教育に専念しているゆえに, 近代初期のヨーロッパとアメリカの思慮深い思想家たちは頻繁に, すべての種類の知恵の泉としてプルタルコスに目を向けた。19世紀まで, プルタルコスはおそらく, 古代史について人々に他の古典期の作家たちを束ねたものより多くのことを(または多かれ少なかれ) 教えたし, また彼がアテナイ民主制について語らなければならなかったことは, お世辞ではなかった。ギリシアの部内者のもっともらしい確実さとローマの部外者の同様にあてにならない客観性とを結びつけながら, つい最近までプルタルコスは, ギリシアの政治史についての史料としての並ぶものない名声を享受した。この名声は, アテナイの見方を形成する上で重大な役割を演じたであろう」と述べる。
- (39) トウキュディデスは, 著者がありのままの事実を探究した成果を執筆して後世の人

に利するように図ったし (1.22.2-3), 正確な真相を得ようと努めた (5.26.5) と述べている。これについては例えば, J. B. ベリー, 高山一十訳『古代ギリシアの歴史家たち』(修文館, 1966/1990年) 77-78, 82-83頁を参照せよ。

- (40) J. Gillies, *H.A.G.* 3 (London, 1820), p. 128. その箇所では、「彼〔ソクラテスのこと, 引用者注〕の告発の遠因は, アリストファネスの『雲』という題名の滑稽な笑劇であって, それについて前の方ではほめかす機会がすでにあった。この破廉恥な公演の中でソクラテスは, 自国の宗教を否定し, 自分の弟子たちの道徳を墮落させ, 詭弁や屁理屈の憎まれるべき技を教える役で登場させられている。放縦な民衆のねたみは, 彼の美德, すなわちあまりにも独立独歩なので民衆のご機嫌をとらないしあまりにもまじめなので彼らにへつらわないというもの, の賜物であるが, しだいにその詩人のなん本かの攻撃の矢に毒を塗り添え, その賢人を装った者がまさにアリストファネスのいらだちの筆が彼について表現したとおりの人物そのものであったことをほめかす悪影響をもたらすことになった」と述べて, いかにもアリストファネスの喜劇がアテネ民衆をしてソクラテスに対する嫉妬心を増幅させたかを読者に語っている。

〔付記〕

本稿は, 平成12-14年度科学研究費補助金基盤研究 (C) (2) 「古代アテネ民主制は衆愚政治であったのか——古代と近代からの探究」(課題番号: 12610407) の研究成果の一部である。